

コプト・エジプト語サイド方言における母音体系と母音字の重複の音価： 白修道院長・アトリペのシェヌーテによる『第六カノン』の写本をもとに¹

宮川 創

ゲッティンゲン大学大学院人文学研究科エジプト学・コプト学専攻、京都大学大学院文学研究科言語学専修、ドイツ学術振興協会共同研究センター1136 (CRC1136) 「古代から中世および古典イスラム期にかけての地中海圏とその周辺の文化における教育と宗教」
smiyaga@gwdg.de

キーワード：コプト・エジプト語、母音字重複、母音体系、写本、シェヌーテ

1 はじめに

本稿では、コプト語の母音組織、特に母音字の音価と母音字の重複の問題について論じる。まず従来の諸説を検討し、新たな論拠を加えながら、母音字の使い分けについては開口度説、母音字重複については声門閉鎖音説の可能性が高いことを論じる。最後に、筆者が行った写本における語中改行の調査による新たな事実を提示し、その結果が母音字重複の声門閉鎖音説を支持することを示す。

1.1 コプト・エジプト語について

コプト・エジプト語は、アフロ＝アジア語族エジプト語派を単独で構成するエジプト語の最終形態であり、紀元前 32 世紀頃のアビュドス U-j 墓から出土した最古の記録²から文字で記録されてきたエジプト語の最も新しい言語段階である。コプト・エジプト語は、コプト文字で書かれるようになったエジプト語であり、民衆文字エジプト語の一部として考えられるエジプト語の散発的なギリシア文字転写であるいわゆる古コプト語を除き、紀元後 4 世紀頃から一般化し、現在は、コプト教徒の活動家³による言語復興運動はあるものの、主にコプト・キリスト教会の典礼言語に用いられ、口語としてはいわゆる *dormant*⁴の状態になっていると言える。

¹ この論文は、第 51 回言語記述研究会例会で行った口頭研究発表「コプト・エジプト語サイド方言の母音体系」、平成 25 年度西アジア言語研究会で行った口頭研究発表「コプト・エジプト語サイド方言の母音音韻論」、第 40 回古代エジプト研究会で行った口頭研究発表「エジプト語歴史音韻論とコプト・エジプト語の母音字重複について」を加筆・修正した上、その内容をさらに発展させたものである。発表準備・論文執筆中に様々な側面での助言をくださった吉田豊先生、発表の際に貴重なコメントをくださった吉田和彦先生、笈川博一先生、永井正勝先生、吉野宏志氏、論文執筆にあたって貴重な助言をくださった千田俊太郎先生、鈴木博之氏に感謝する。

² Dreyer 2011:127-136 をみよ。

³ この中でも、イクラディユース・ラビーブはコプト語復興運動を牽引した(Basta 1991, 三代川 2013)。

⁴ Lewis et al. 2016 による。

コプト・エジプト語は、エジプト語としての連続性を強調した歴史言語学的な用語であり、一般的にはコプト語と呼ばれる。本稿では、こののち、便宜のためコプト語と呼称する。また、コプト語以前のエジプト語を、コプト語は古代ローマ期にも使われていたため若干齟齬はあるものの、古代エジプト語と便宜のために称することにする⁵。

コプト語には数種の方がある。学者によってはさらに詳細に区分けする学者もいるが、大別すれば、ボハイラ方言(ボハイル方言、ブハイラ方言)、オクシュリユンコス方言(オクシリンコス方言、中部エジプト方言)、ファイユーム方言、サイード方言(サヒド方言、サヒード方言、サイド方言)、リュコポリス方言(リコポリス方言、準アフミーム方言、準アクミーム方言)、アフミーム方言(アクミーム方言)に分かれる。このほか、綴りなど異なるものとして、古テーベ方言(原サイード方言)、古ボハイラ方言があるが、これらの資料数はごく少数である。なお、ギリシア文字で転写した民衆文字エジプト語を古コプト語と称するが、これらはエジプト語言語学者の間では、民衆文字エジプト語に入れるのが常である(Kammerzell 2000:97)。本稿では、このうち、最も資料が多く残されたサイード方言を中心に論ずる。サイード方言は、3世紀頃にコプト語の諸方言のなかで、標準語の地位を確立した方言であり、その地位は9世紀頃にボハイラ方言が標準語的な地位を奪うまで続き、その間に多数の文献を残した。グノーシス主義と原始キリスト教を知る上で重要な地位を占めているナグ・ハマディ写本群の文書の大半も、リュコポリス方言の影響をある程度受けたサイード方言で書かれている。

コプト語は24のギリシア文字のアンシャル体と大部分の方言では6ないし7のエジプト民衆文字から派生した文字を用いる。サイード方言では母音字は6つである。ここでは、コプト語が用いるこの音素文字(アルファベット)をコプト文字と呼称する。このコプト文字は、母音を表わす文字を完全に備えている。これに対して、コプト語以前のエジプト語で用いられていた3種のエジプト文字(聖刻文字、神聖文字、民衆文字)は、音素文字、表語文字、決定文字の混合であり、このうちの音素文字は主に子音を表す文字のみ(アブジャド)であった。よって、母音字を有するという点においてコプト文字は母音字を有しない古代エジプト文字とは異なる。コプト文字は、一般的な方言では、6つの母音文字および24ないし25の子音文字に大別される。母音文字を備えている点で、コプト語は聖刻文字の解読者ジャン・フランソワ・シャンポリオン以来、古代エジプト語、つまり古エジプト語、中エジプト語、新エジプト語、民衆文字エジプト語(いわゆるデモティック)の母音を再建する鍵となった。この古代エジプト語の母音を再建する分野を、エジプト語言語学の中では、ヴォーカリゼーション(vocalization)と呼ぶ。もちろん、アッカド語などの、楔形文字によるエジプト語転写、および古コプト語と呼ばれる、民衆文字エジプト語のギリシア文字転写もvocalizationの鍵となりうるのだが、これらの資料の数は限られているのに対し、コプト語

⁵ コプト語は古代末期から中世にかけて最も盛んに用いられ、近現代でも典礼言語として使用されているという点において古代のみに用いられた言語ではない。それに対し、コプト語より前のエジプト語は、古代にのみ用いられたという点において古代エジプト語である。

資料は豊富にある。このため、コプト語の音声は **vocalization** の最大の根拠となるのである。また、コプト語以前のエジプト語の子音の再建に関しても、コプト語の子音が最重要の資料となっている。このように古代エジプト語の音組織の再建の分野でコプト語は最も重視されてはいるが、コプト語は音素文字という音素を個別に表わす音素表記に極めて近い文字を使っていたのにもかかわらず、コプト語の音価自体は、完全に解明されたとは到底言えない。これは、コプト文字がギリシア文字というギリシア語を表記するための文字を借用した結果である。子音に関しては、コプト文字は、民衆文字からギリシア語にはない子音音素を表わす文字を転用しているため、ある程度の精確さは担保されている。しかしながら、母音文字にかんしては、ギリシア文字とまったく同じであり、民衆文字から追加された文字はない。このため、コプト語の母音組織については未だ不明瞭である。本稿では、このコプト語の母音組織、特に母音字の音価と母音字の重複の問題について論じる。

表 1: コプト文字の一覧

	文字
子音字	Β Γ Δ Ζ Η Θ Κ Λ Μ Ν Ξ Π Ρ Σ Τ Φ Χ Ψ Ω ϣ ϛ ⁶ Ϟ ϟ Ϡ ⁷ (ϡ ϣ Ϥ ϥ Ϧ ϧ Ϩ ϩ Ϫ ϫ Ϭ ϭ Ϯ ϯ ϰ ϱ ϲ ϳ ϴ ϵ ϶ Ϸ ϸ Ϲ Ϻ ϻ ϼ Ͻ Ͼ Ͽ Ͽ ⁸ Ͽ ⁹)
母音字	α ε η ι ω ο υ
母音+子音字	ϣ /ti/
補助記号	̄ ¹⁰ ̅ ¹¹ ̆ ¹² ̇ ¹³ ̈ ¹⁴
数字にのみ用いられる文字 ¹⁵	ϥ

⁶ 主にボハイラ方言で用いられ、サイード方言では用いられない。

⁷ 主にアフミーム方言で用いられ、サイード方言では用いられない。

⁸ これらは、古コプト語や、古テーベ方言(P方言)など、古い方言に見られる。注意すべきは、古コプト語や古テーベ方言で、ϡが声門閉鎖音を、ϣが有声咽頭摩擦音を表すとされていることである。Allen (2013:12)および Kasser (1991)をみよ。

⁹ 行末で使われ、n <n>と同じである。

¹⁰ 単独スープリニアーストローク。主に1子音の単語に用いられるが、印刷の関係上、現代の古い諸エディションでは次の2子音結合スープリニアーストロークや3子音結合スープリニアーストロークの代用として用いられてきた。これらのエディションでは、2子音結合スープリニアーストロークの代用では後ろの子音に、3子音結合スープリニアーストロークの代用では中央の子音字に、単独スープリニアーストロークが用いられている。

¹¹ 2子音結合スープリニアーストローク。3子音結合スープリニアーストロークもある。

¹² 主に、疑問代名詞のου <ou>に用いられる。

¹³ 母音字の上に用いられることが多い。

¹⁴ ボハイラ方言で主に用いられる。ジンキムと呼ばれる。

¹⁵ コプト語の数字には、古代ギリシア語やゲエズ語などと同様、アルファベットが用いられた。α = 1, β = 2, γ = 3, Δ = 4...である。なお、文字を数字として用いられる時は上線(スープリニアーストローク)を持つか、上線と下線の両方を持つことが多い。数字の6は通常のコプト語のアルファベットとしては用いられないソウϥを用いる。

コプト文字の母音文字は7つある。すなわち、アルファ(α)、エータ(η)、イオタ(ι)、エプシロン(ε)、オミクロン(ο)、ユプシロン(υ)、オメガ(ω)である。このうち、コプト語では、ギリシア語からの借用語を除き、ユプシロンが単独で使われることはなく、つねにオミクロンの後で用いられる。アルファは広母音、エータおよびエプシロンは非円唇前舌中母音に近い母音、オメガおよびオミクロンは円唇後舌中母音に近い母音、イオタは非円唇前舌狭母音を表し、オミクロンとユプシロンの組み合わせは円唇後舌狭母音、エプシロンとイオタの組み合わせは円唇前舌狭母音をそれぞれ表わすとされている。

表 2 : ギリシア文字母音字とコプト文字母音字との比較

	アルファ	エプシロン	イオタ	オミクロン	ユプシロン	エータ	オメガ
ギリシア文字	α	ε	ι	ο	υ	η	ω
コプト文字	Ⲁ	Ⲅ	Ⲑ	Ⲓ	Ⲙ	Ⲟ	Ⲝ

2 コプト語母音字の問題: ηとε、οとω の対立と母音字重複

2.1 問題の所在とギリシア語および古ヌビア語における証拠

現在、これらの母音字の音価を巡って学者間で意見が対立している。すなわち、エータとエプシロン、オメガとオミクロンの音価の差異を説明するかという問題、および母音字が重複した時の音価はどうなるかという問題である。この解決策として、エータとオメガはエプシロンとオミクロンのそれぞれ長母音とする説(音長説)、エータとオメガはエプシロンとオミクロンとはそれぞれ別の開口度であるとする説(開口度説)、母音字重複に関しては、母音字重複はその母音字の音価の長母音を表すとする説(長母音説)、母音字重複はその母音字の音価の後に声門閉鎖音が来ることを表すとする説(声門閉鎖音説)がある。例えば、(0)エータがエプシロンの、オメガがオミクロンのそれぞれ長母音(音長説)で、かつ重複母音字が長母音を表す(長母音説)ならば、エータおよびオメガの重複は超長母音を表すということになる。また、この(0)の条件下では、エプシロンの重複とエータ、オミクロンの重複とオメガは同じ音価であるということになる。もちろん、世界にはエストニア語¹⁶など、母音の超長母音がある言語もあるが、このような超長母音は今日伝えられているコプト語の教会発音にはなく、また、開口度が中程度の母音にのみ、超長母音が存在するということを支持する証拠もない。このように、長母音説と音長説の組み合わせは蓋然性が低いのに比べ、(1)開口度説と音長説、および(2)長母音説と声門破裂音説、(3)開口度説と声門破裂音説はそれぞれありえる。(1)はグリーンバーグ(Greenberg 1962)によって、(2)はレイトン(Layton 2011)、デパイト(Depuydt 1993)、クヌセン(Knudsen 1962)らによって(3)はライントゲス(Reintges 2004)、ラムディン(Lambdin 1983)らによって支持されている。なお、開口度説の中では、ライントゲスのみがエータとオメガをエプシロンとオミクロンよりも口の開きが

¹⁶ 査読者の1人によれば、エストニア語の超長母音は超分節音的音特徴として考えるのが現在の学界の傾向であるとのことである。

広い音であるとするのに対し、その他の学者は、口の開きが狭い音であるとしている。(0)の長母音説と音長説は、誰も拒否する理由を明確にはしていないものの、おそらく上記の理由などで支持する者はいない。

(0)の説・・・η[e:], ε[e], ω[o:], ο[o], αα[ɑ:], ηη[e:], ωω[o:]

(1)の説・・・η[e], ε[ɛ], ω[o], ο[ɔ], αα[ɑ:], ηη[e:], ωω[o:]

(2)の説・・・η[e:], ε[e], ω[o:], ο[o], αα[ɑʔ], ηη[eʔ], ωω[oʔ]

(3)の説・・・η[e], ε[ɛ], ω[o], ο[ɔ], αα[ɑʔ], ηη[eʔ], ωω[oʔ]

現在、文法記述において最も一般的な説は(2)である。可能性が低い(0)を外すと、(1)-(3)のうちで、唯一長母音説をとっているのも(2)である。しかしながら、この説は、特に長母音説において、欠点がある。前述したように、コプト文字の母音字はギリシア文字から借用されたものである。コプト文字の使用が標準化し始めた紀元後2世紀¹⁷のギリシア語は、コイナー・ギリシア語と呼ばれる。エジプトはその乾燥した気候と、パピルスの生産地とのもともあって、アレクサンドロス大王のエジプト征服(紀元前332年)から、プトレマイオス朝エジプト(紀元前305年-紀元前30年)、ローマ帝国、ビザンツ帝国の属州エジプト(紀元前30年-紀元後639年)の約1,000年間にかけて、ギリシア語パピルスが最も数多く残されている土地である。これらの豊富なパピルス資料から、コイナー・ギリシア語のエジプトでの発音を再建する試みがなされてきた。アレクサンドロス大王がエジプトを征服し、暫くしてプトレマイオス朝が樹立された直後の紀元前3世紀の教育を受けた話者のギリシア語母音字の発音は Horrock (2010)によれば、以下のとおりである。

表 3 : 紀元前 3 世紀・高位変種(Horrock 2010:166)

文字	音価
ι, ει (子音の前もしくは語末で), ηι (η)	[i:]
ι	[i]
υ	[y:]
υ	[y]
ει (母音の前で), η	[e:]
ε	[e]
α	[ɑ:]
α	[ɑ]
ω	[o:]
ο	[o]

¹⁷ 「コプト文字の成立時期については、ギリシア文字からの借用字形が Ε や Σ や Ω ではなく、ε や ς や ω であることから、ヘレニズム時代以降であることが明らかである。また、アルファベット式数字表記もこれを支持する。なぜなら、いずれもその頃に現われ、ローマ時代に一般化したからである。」 (塚本 2001:437)

ου	[u:]
ου	[u]
υι	[yi]
ευ	[eu]
ηυ	[e:u]
αι (α)	[a:i]
αι	[ai]
αυ	[au]
ωι (ω)	[o:i]
οι	[oi]

これが、紀元前2世紀までには次のように変わる。この時期には、音長説を支持しうるような、母音の長短の区別は消えており、ηとεの区別は舌の高さの違いになっている。

表4：紀元前2世紀(Horrocks 2010:167)

文字	音価
ι, ει (子音の前もしくは語末で), ηι (η)	[i]
υ	[y]
ει (母音の前で), η	[e]
οι	[ø]
ε, αι	[e]
α, αι (α)	[a]
ο, ω, ωι (ω)	[o]
ου	[u]
υι	[yi]
ηι	[iw]
ευ	[ew]
αυ	[aw]

次に、サイド方言で多数のコプト語文献が書かれた時期である、ビザンツ期初期(紀元後4世紀末-)のコイナー・ギリシア語エジプト方言の母音字の音価を以下の表に示す。引き続き、音長説で弁別的とされた母音の長短の区別はなくなっている。

表5：ビザンツ期初期エジプト(Horrocks 2010:167)

文字	音価
ι, ει, η, ηι	[i]
υ, υι, οι	[y]
ε, αι	[e]
α, αι	[a]
ο, ω, ωι	[o]
ου	[u]
ηυ	[if], [iv]
ευ	[ef], [ev]
αυ	[af], [av]

Horrock (2010)による再建は Allen (1987)による再建とも概ね合致している。このギリシア文字の音価は、コプト文字の音価における開口度説を支持する。

また、コプト文字にメロエ文字から派生した数種の文字を加えた文字を用いた古ヌビア語(ナイル・サハラ語族)では、現代ヌビア諸語からの再建から、短母音と長母音の区別があるとされる。ブラウンはその古ヌビア語の文法書(Browne 1989)の中で、開口度説を取り、かつ母音字の重複に関しては長母音説を取っている。hとε、ωとoに関して音長説を取らない理由は、ノビイン語やドンゴラウィー語などの現代ヌビア諸語の長母音は、開口度が中程度の母音だけでないこと、および、これらにはエストニア語にみられるような超長母音が存在しないこと、現代ヌビア諸語と古ヌビア語の同源語において、古ヌビア語の母音字の重複が現代ヌビア諸語の長母音にあたることが考えられる。

表 6 : 古ヌビア語におけるコプト文字母音字の音価(Browne 1989:3)

古ヌビア語コプト文字	音価
α	[a]
ο	[o]
ω	[o]
ι	[i]
ε	[e]
η	[i]
οΥ	[u]
ē	[e]
ei	[i]

これらのギリシア語および古ヌビア語の母音字の音価の再建から、コプト語の母音字におけるエータとエプシロン、オメガとオミクロンの違いが音長ではなく、開口度であることが推定される。

2.2 古典アラビア語における証拠

グリーンバーグは、コプト語の母音字の音価を扱ったその 1962 年の論文(Greenberg 1962)において、古典アラビア語単語のコプト語転写を用いて音長説を退け、開口度説を支持している。古典アラビア語単語のコプト語転写、およびコプト語単語のアラビア語転写に関しては Richter (2006)をみよ。アラビア語は、紀元後 639-642 年に行われた、第 2 代正統カリフであるウマル・イブン・アル=ハッターブのイスラム共同体(ウンマ)による、将軍アムル・イブン・アル=アースに率いられたイスラム軍のエジプト征服後、行政言語としてエジプトで用いられるようになり、中世のイスラム世界の医術の興隆もあって、イスラム征服後のコプト語医学書において医学・薬学の専門用語としてアラビア語の単語はよく用いられるようになった。

表 7: アラビア語単語のコプト文字転写(Greenberg 1962 および Chassinat 1921)

	アラビア語単語	コプト文字転写
(i)	حَوْلَان /ħawla:n/	χαυλεν <hauen>
(ii)	مِلْح /milħ/	μηρḡ <mêlh>
(iii)	صَبِير /šbir/	σαπηρ <sapêr>
(iv)	الْبُرَام /albura:m/	αρρωλμ <arfôlm>

グリーンバーグが用いたのは、シャシナによって編集された医学パピルス(Chassinat 1921)である。彼は、表 7 の(i)–(iii)の 3 例を挙げている。(i)の例では、アラビア語の長母音/a:/にコプト文字エプシロン<e>が対応している。(ii)の例では、アラビア語の短母音/u/をコプト文字の<δ>で表しており、(iii)の例では、アラビア語の短母音/i/をコプト文字の<ε>で表している。また、(iv)は、Greenberg (1962)では挙げられていないが Chassinat (1921:22)には存在する例である。(iv)ではアラビア語の短母音/u/が、コプト語のオメガに対応していることがわかる。

(ii)と(iii)ではhが/i/に、(i)の例からはεがアラビア語の/a:/に近かったことがわかる。これらは、hの開口度が狭かったこと、および、εの開口度が広がったことを示し、開口度説の証拠になりうる。アラビア語は、3 母音体系の言語であり、かつ長母音と短母音の区別がある。よって、このパピルスでは、アラビア語の長母音である/a:/をεで、短母音である/u/をωで音訳していることになる。コプト語内でも、ωとογの同語異綴りがサイド方言内でみられることが、岡島 (1942)によって指摘されている¹⁸。アラビア語の/u/がωで書かれていること、ογとoが置き換わらないことから、ωはoよりも開口度が小さい母音である可能性が高く、これは開口度説を支持する。

音長説ではωとhは長母音で、oとεは短母音である。もし、音長説が正しければ、ωとhはoとεに対して、明確に長かったことになり、明確な母音の長短があるアラビア語の短母音を借用する際は、ωとhは用いられなかったはずである。しかし、実際は(iv)のように短母音/u/に対してωが(ii)と(iii)のようにアラビア語短母音/i/に対してhが用いられた。この音長説に対する反例は、音長説ではなく開口度説を支持する根拠の 1 つとなる。

また、仮にアラビア語の長短の区別がコプト語にもあるとすると、表 7 のデータからみるとεが長母音でhが短母音ということになる。なぜなら、表 7 の(ii)と(iii)の例では、hがアラビア語の短母音の/i/に、(i)の例では、εがアラビア語の長母音の/a:/に対応しているからである。しかし、この解釈は、コプト文字ε、hの元になったギリシア文字ε、ηの音価史からいって、ありえない。そこで、このコプト文字転写の基準になった当時のコプト語のεとh、oとωの発音には長短の区別がなく、母音の音色の違いによって書き分けられたのだと考えるほかない。よって、このアラビア語コプト語転写のデータは、この点でも開口度説を支持する。

¹⁸ 「稀ニ、子音 ω x 及ビ σ ノ後ノ ω ニογガ表ハレル。例ヘバ ωογωτ “窓” ノ代リニ ωωωτ」 (岡島 1942:13)

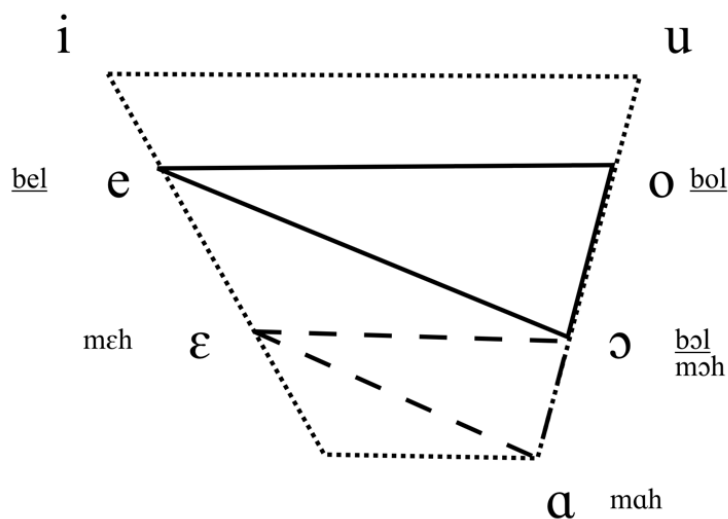
Chassinat (1921)のように、イスラムのエジプト征服以降、コプト文字によって、アラビア語単語が書かれた文献がいくつか存在する(Richter 2006:495ff.)。Richter (2006)は、アラビア語単語のコプト文字転写をまとめたものであり、開口度説を支持する多数の例を有する。イスラム征服時には、エジプトの住民の母語は大部分がコプト語であったが、イスラムの支配によって、エジプト社会は、アラビア語を高位言語、コプト語を低位言語とするダイグロシア状況になり、アラビア語を母語とする者の割合が高くなっていき、早くとも13世紀、遅くとも17世紀に母語・第一言語(L1)としてのコプト語は一旦消滅し、コプト語は典礼でのみ用いられる「典礼言語」になった。イスラム征服後もコプト語が母語として十分残存している地域で、コプト文字によってアラビア語単語が転写されたのであるが、このように、アラビア語単語コプト文字転写におけるそのコプト文字の用い方も、コプト語の音価と音韻を知る傍証となるのである。

2.3 コプト語動詞活用における母音変化

また、グリーンバーグ(Greenberg 1962:433)は、コプト語の動詞活用における例を開口度説の証拠の1つとしている。コプト語の動詞には絶対形、前名詞形もしくは構成形、前代名詞形、状態形の4つがある。このほかに、少数ながら、命令形(さらには命令前名詞形、命令前代名詞形、命令絶対形)をもつ動詞もある。絶対形、前名詞形、前代名詞形、状態形の変化は主に母音の変化によって示される(<ɤ>が付加される動詞もある)。グリーンバーグは、**βωλ** <bôl>「解く」と **μορ** <moh>「充す」というボハイラ方言¹⁹の2つの動詞の変化を上げている。**βωλ** <bôl>と **μορ** <moh>は絶対形であり、これらの前代名詞形はそれぞれ **βολ** <bol>と **μαρ** <mah>、状態形は **βηλ** <bêl>と **μερ** <meh>である。ここで音長説をとると、**βωλ**、**βολ**、**βηλ**と **μορ**、**μαρ**、**μερ** は [bo:l]、[bol]、[be:l]、および、[moh]、[mah]、[meh]となる。それに対して開口度説をとると、[bol]、[bɔl]、[bel]、および、[mɔh]、[mah]、[meh]となる。次ページの図1のように母音の三角形で書くと、開口度説であれば、舌の動きは規則的になるのに対し、音長説では不規則的になる。ちなみに、**α** <a>はここまで [a] で書いたが、前よりの [a] であったか、後ろよりの [a] であったかは不明であるが、[a] であったとすると、次ページの図1のようにさらに規則的になる。なお、**βολ** <bol> の変化は最も規則的なものであり、**μορ** <moh> の変化は語末が喉音の時である。

¹⁹ 絶対形 **μορ** <moh>、前代名詞形 **μαρ** <mah>、状態形 **μερ** <meh> はボハイラ方言の動詞変化である。サイド方言では絶対形 **μογρ** <mouh>、前代名詞形 **μαρ** <mah> あるいは **μορ** <moh>、状態形は **μερ** <meh> となる(Crum 1939:208)。なお、本稿本文では Greenberg (1962) に合わせるために、前代名詞形には **ρ** の記号を付していない。**ρ** は、名詞や動詞など接尾代名詞以外に付けられた場合、接尾代名詞が必ず後続することを示す、コプト学の記法である。

図 1 : 動詞活用に伴う母音の変化 (開口度説)



		音長説	開口度説
通常 :	ω ⇨ o ⇨ h	/o:/ /o/ /e:/	/o/ /ɔ/ /e/
喉音前 :	o ⇨ a ⇨ ε	/o/ /a/ /e/	/ɔ/ /a/ /ε/

3 母音字重複について

グリーンバーグによる構造主義的共時態研究、および借用語研究、そして、ギリシア文字、ヌビア語コプト文字の音価などの様々な観点から、母音字の音長説は開口度説に比べ、可能性が低い。そのため、残りの説は、(a)開口度説かつ母音字重複声門閉鎖音説、および、(b)開口度説かつ母音字重複長母音説となる。これらの証拠となりうるものとして、コプト語の綴りとコプト語以前のエジプト語の声門閉鎖音および有声咽頭摩擦音の対応が考えられる。コプト語以前のエジプト語、すなわち、古エジプト語、中エジプト語、新エジプト語および民衆文字エジプト語における声門閉鎖音と有声咽頭摩擦音はコプト語では合流したとされる。その証拠に、現代標準アラビア語およびエジプト・アラビア語には、声門閉鎖音と有声咽頭摩擦音の区別があるにもかかわらず、コプト語の現代教会発音では、有声咽頭摩擦音は用いられない。

なお、古代エジプト語で、声門閉鎖音を表すエジプト文字の転写は;であり、セム諸語の諸文字の声門閉鎖音を表す文字の類推からアレフと呼ばれる。有声咽頭摩擦音を表すエジプト文字の転写はアインと呼ばれ、セム語学と同様'で記述される。聖刻文字(ヒエログリフ)、神官文字(ヒエラティック)、民衆文字(デモティック)からなるエジプト文字は、表語文字、子音文字、決定文字から構成されている。このうち子音文字は、1 つの子音を表す単子音文字、2 つの子音を表す複子音文字、3 つの子音を表す三子音文字に分けられる。単子音文字でアインを表す文字は腕の形態をした𐀀で、アレフを表す文字はワシの形態をした𐀁である。なお、古エジプト語では、エジプト語単語の楔形文字転写から、アレフは口蓋垂震え音[r]を表していたが、後に声門閉鎖音になったと考えられる(Loprieno 1997:33)。この

アイン、アレフの痕跡は、コプト語では、古テーベ方言に残っており、 Ⲁ が声門閉鎖音を、 Ⲅ が有声咽頭摩擦音を表すとされ、サイド方言の母音字重複に対応する。例: 古テーベ方言 ⲑⲟⲁⲡ 、アフミーム方言 ⲕⲟⲟⲡ 、ファイユーム方言 ⲕⲣⲁⲁⲡ 、リュコポリス方言 ⲕⲟⲟⲡ 、サイド方言 ⲕⲟⲟⲡ 、ボハイラ方言 ⲕⲟⲡ 、オクシュリユンコス方言 ⲕⲣⲁⲡ ‘existent’ (Allen 2013:12)。これは有力な母音字重複声門閉鎖音説の証拠である。

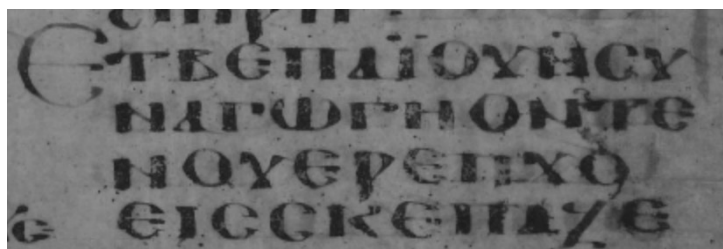
また、チェルニーによるコプト語語源辞典(Černý 1976)は、コプト語とコプト語以前のエジプト語の同源語をまとめた辞典として定評がある。この辞典において、コプト語の母音字重複と、アインおよびアレフの分布を調べた結果、次の例があった。 ⲙⲁⲁⲃ <maab> ‘thirty’ ← $m^{\text{c}}b^{\text{z}}$ ‘thirty’、 ⲟⲩⲏⲏⲃ <ouêêb> ← 古代エジプト語 $w^{\text{c}}b$ ‘priest’、古・中・新エジプト語 $\text{š}^{\text{c}}d$ → 民衆文字エジプト語 $\text{š}^{\text{c}}t$ → コプト語 ⲟⲩⲟⲩⲧ <šôôt> (Černý 1976:254)。

これらの例では、古代エジプト語でアインもしくはアレフがある位置にコプト語の母音字重複が来ている。このことは、母音字重複声門閉鎖音説を支持する。また、セム語(ヘブライ語 שָׁׁר <šé‘êr>、アラム語 ܫܝܪܐ <šé‘ārā>など) >> Dem. $\text{š}^{\text{c}}r$ → ⲕⲣⲁⲁⲣ <šaar> ‘price’ (Černý 1976: 250)のようにセム語の有声咽頭摩擦音 ʃ/ と対応する母音字重複があるのも母音字重複声門閉鎖音説の重要な証拠である。

4 写本における語中改行

今回、これらの調査の他に、これまで誰も切り込んでこなかった点において、調査を行った。コプト・エジプト語が書かれた写本を見ると、語内で改行・改ページしているものや、形態素内で改行・改ページしているものがある。中には P.Macq. 1(Choat & Gardner 2013)のように、全く音節境界を無視して改行している写本はあるものの、ナグ・ハマディ写本群のように、ある程度は音節境界を意識して改行しているものもある。こうした音節境界を意識して改行している写本で、母音字重複が改行位置にきたときに、どの位置で改行されるかの頻度を調べれば、母音字重複への正しい理解を得られると期待できる。

図 2 : 語中改行の例(フランス国立図書館 Copte 130² f. 19r)²⁰



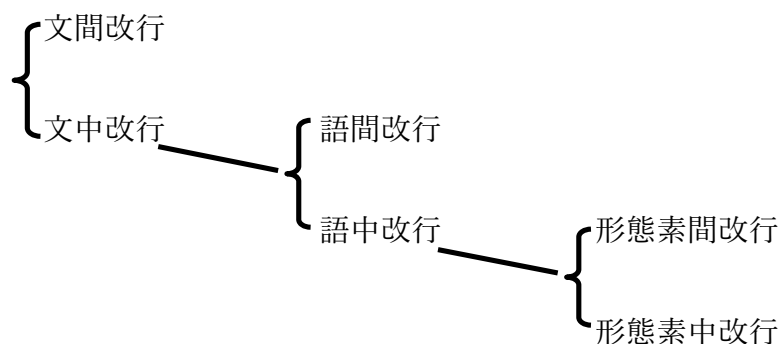
ⲉⲧⲃⲉⲡⲁⲓ ⲟⲩⲏⲏⲃ | ⲏⲁⲒⲟⲩⲏ ⲟⲩⲏⲏⲃ |
 <etberpai ouñsu|nagôgê on' telnou erepčoleis skepaze>

²⁰ 画像は Gallica (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52504721n/f19.item.r=Copte.zoom>, accessed 2017-02-20)から取られた。

ここでは、前ページの図2の白修道院 XV 写本の p. 75 (Bibliothèque nationale de France, Copte 130² f. 19r) の第2カラムの例を挙げて説明する。|を改行位置とする。この写真の中では3つの語中改行と、1つの語間改行がある。語中改行は、どれも音節境界に来ている。

以下の図で、改行の類型をまとめた。

図3 改行の類型論



コプト語文献の著者の中で最も多く著作を残したのは、シェヌーテである。シェヌーテは、現在の上エジプトのソハーグの郊外に当たるアトリペに位置する白修道院、赤修道院および女子修道院の第3代目掌院および修道院長であり、この修道院群の発展に多大に貢献した。彼の生涯は後継者のベーサが書いたと伝えられている『シェヌーテ伝』(Leipoldt & Crum 1906)に描かれているが、この聖人伝は、他の聖人伝と同様、実際の聖人の生涯を正確に表したものだとは考えられていない。シェヌーテ学者たちは、基本的に、シェヌーテが直接著作したとされる9つのカノンおよび8つのロゴイ(ディスコース)をもとに彼の生涯を再建する。これらは、後に彼の弟子たちが、彼の書簡や説教文を編集したものである。これらのカノンとロゴイの諸写本は白修道院のスクリプトリウム(筆写室)で筆写され、大半が、白修道院の図書館跡で発見された。その後、ヨーロッパのエジプト学者などによって欧米に持ち込まれ、様々な経緯を経て、その写本群の諸ページは現在フランス、イタリア、イギリス、ロシア、アメリカ、ドイツ、オーストリアを中心とした幾つかの図書館や博物館などに保管されている。

そのうちの『第六カノン』の写本の一つ、白修道院 XF 写本²¹を筆者はフランス国立図書館、ナポリ国立図書館、カイロ・コプト博物館、大英図書館に分散されて所蔵されている

²¹ 欧文では、MONB.XF と記される。MONB はイタリア語 Monasterio Bianco (白修道院)の略称である。MONB.XF 等の記号 (シングルム) は、コプト語写本電子データベースであるコプト語文学的写本コーパス Corpus dei Manuscritti Copti Letterari (<http://www.cmcl.it/>, accessed on 2017-02-20) で用いられ、その後コプト学者らによって用いられている。なお、この letterari は英語におけるパピルス学の用語である literary と同様に、literary な資料は、行政・経済文書や日常生活で用いたメモおよび手紙や記録を含む documentary な資料以外に相当し、文学的文献および宗教的文献を含むものである。

諸ページの写真を見ながら、コンピュータ上でユニコードを用いて転写し、その転写を用いて、母音字重複と語中改行の関係について調べた。白修道院 XF 写本自体は、そのコロフォン²²から、アパ・セトの指導の 8 年目のパオーネ月 15 日²³、第 6 インディクティオ²⁴に筆写されたものであることが指摘されている。Van Lantschoot はこれを 10 世紀に推定している(Emmel 2004:168)。この写本の諸ページは Emmel (2004)によって同定されたものである。

今回用いた資料は、XF 写本のうちの 1-28 ページ、203-278 ページである。47、48、77、78、87、88、155、156、179、180、191、192 ページは断片であり、その他のページ数不明の 6 つの断片を含めて、これらの断片は語中改行を調べるには、不完全であるため、除外した。残りのページは未発見である。

これらを用いて語中改行を調べた結果、以下のことがわかった。(1)母音字重複の真ん中で語中改行が行われたのは 67 例、(2)母音字重複の前で語中改行が行われたのは、20 例、(3)母音字重複の後で語中改行が行われたのは、16 例であった。なお、余白はあり、ある程度列の端は合っているものの、余白にはみ出ている列も数多く見受けられた。このことから、(1)-(3)のどれかを意図的に避けることは可能だったはずである。(1)の例としては、ετοιοτη̄、ἴπεχολος、εντακτα|αςなどがあげられる。最初と次の例ではオミクロン o <o>の重複の中央に改行が、最後の例では、アルファ α<a>の重複の中央に改行がある。(2)の例としては、μαγ|ααῡ、ετογ|ααῡ、 ἴρενῖμε|ιοουε̄があげられ、(2)の最初の例はアルファの重複の前で改行が、残りの例では、オミクロンの重複の前で改行が行われている。(3)の例では、ετοιο|τη̄、ετμοιο|ουε̄、 εμπτρεπμαα|χε̄などがあげられ、前二者はオミクロンの、最後の例はアルファの重複の後で改行がなされている。

これらのように、母音字重複周辺の改行について、中央での改行がほぼ半数を占めていることがわかった。これは、母音字重複長母音説を支持しない証拠である。なぜならば、コプト語写本の筆記者はしばしばその筆写元のテキストを誰かが読んだものを聞いて、筆写したと考えられるが、母音字重複長母音説であれば、わざわざ長母音を聞いて、その中央で改行した、としか考えられないからである。これに対し、母音字重複声門閉鎖音説も問題があるとみられるかもしれない。なぜなら、例えば、ἴπεχολος /mpet'ioʔs/では改行が声門閉鎖音と歯茎摩擦音の前に来る。しかし、音節の観点に立てば、この場合、ソノリティは、声門閉鎖音よりも歯茎摩擦音が大きく、最後の子音/s/でソノリティのピークをなすことから、ここで音節核を形成し、/ʔs/で 1 つの音節を形成していると見ることができる。εντακτα|ας、ετοιοτη̄も同様である。母音字-改行-母音字の例の中には母音字-改行-母音字が語末の例はなく、必ず、母音字-改行-母音字の後ろに子音か他の音節が来る。声門閉鎖音は最も聞こえ度が低い音であるため、必然的に、その後ろで音節が形成される。よって、改行は音節境界間に来ていることになり、これは写本を音読筆写する上で自然な

²² 著作の末尾に記された著作のタイトル、著者名、書記名などの情報。

²³ 現在日本で用いられているグレゴリオ暦では 6 月 9 日。

²⁴ ローマ時代から用いられた 15 年周期の年代単位。

ことである。よって、母音字重複で語中改行がその2つの母音字の真ん中に来ることが多いことは、母音字重複声門閉鎖音説を支持する。

なお、ここまで「語」と称してきたが、コプト語の「語」の認定には様々な議論がある。最もよくつかわれている Layton (2011)の文法書では「語」を用いず、形態素の音韻論的な集まりとしての単位として束縛集合(bound group)を導入している(Layton 2011:25)。これは単一の強勢を共有し、発声時に途切れない形態素の集合体である。言語類型論の議論から出た用語を借りれば、「音韻語」²⁵と呼ぶこともできる。本稿では、「語」は束縛集合、もしくは音韻語を指している。

5 終わりに

今回、互いに関係しているエータとエプシロン、オメガとオミクロンの音長説、開口度説、母音字重複の声門閉鎖音説、長母音説をめぐって議論を行った。ギリシア文字の音価、古ヌビア語コプト文字の音価、アラビア語単語コプト文字転写、コプト語の動詞の活用からエータとエプシロン、オメガとオミクロンの関係は、開口度説の可能性がより高いことがわかった。母音字重複の方は、古テーベ方言の声門閉鎖音と有声咽頭摩擦音を表す文字とサイド方言の同源語の綴りの対応、古代エジプト語のアインとアレフとサイド方言との同源語の綴りの対応、シェヌーテ『第六カノン』白修道院 XF 写本の語中改行から、声門閉鎖音説がよりありうることがわかった。最後の語中改行の研究はパイロットスタディであり、より多くの写本において同様の事例研究をすることが今後求められる。

略号

X → Y X から Y への歴史的変化

X >> Y X から Y への借用

参考文献

岡本誠太郎 (1942) 『こふと語小文典』奈良：飛鳥園。

塚本明廣 (2001) 「コプト文字」 『世界文字辞典』言語学大辞典、別巻。東京：三省堂。436-440。

三代川寛子 (2013) 「20世紀初頭におけるコプト・キリスト教徒の民族意識形成-コプト語復興運動を中心に」日本オリエント学会第55回大会研究発表。

Allen, James P. (2013). *The ancient Egyptian language: An historical study*. Cambridge: Cambridge University Press.

²⁵ Dixon & Aikhenvald (2002)をみよ。

- Allen, W. Sydney. (1987). *Vox Graeca: The pronunciation of classical Greek*. 3rd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Basta, Munir. (1991). Iqladiyus Labib (1873-1918), In: Aziz Suryal Atiya (ed.) *The Coptic encyclopedia*, vol. 4, Macmillan
- Chassinat, Émile. (1921). *Un papyrus médical copte*. Mémoires publiés par les membres de l'Institut français d'archéologie orientale du Caire, 32.
- Černý, Jaroslav. (1976). *Coptic etymological dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Choat, Malcolm and Iain Gardner. (2013). *A Coptic handbook of ritual power: The Macquarie papyri*. Turnhout: Brepols.
- Crum, Walter Ewing. (1939). *A Coptic dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- Depuydt, Leo. (1993). On Coptic sounds. *Orientalia (neue)*. 63, 338-375.
- Dixon, R. M., & Aikhenvald, A. Y. (2002). Word: a typological framework. In: R. M. Dixon, & A. Y. Aikhenvald (eds.), *Word: A cross-linguistic typology*, 1-41.
- Dreyer, G. (2011). Tomb U-j: A royal burial of Dynasty 0 at Abydos. In: Emily Teeter (ed.), *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization*, 131-8.
- Greenberg, Joseph H. (1962). The interpretation of the Coptic vowel system. *Journal of African Languages*, 1, 22-29.
- Emmel, Stephen. (2004). *Shenoute's Literary Corpus*, vol. 1 & 2. Leuven: Peeters.
- Hintze, Fritz. (1980). Zur koptischen Phonologie. *Enchoria* 10:23-91.
- Horrocks, Geoffrey. (2010). *Greek: A history of the language and its speakers*. 2nd ed. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Knudsen, Ebbe E. (1961). Saidic Coptic vowel phonemes. *Acta Orientalia* 26, 29-42.
- Lambdin, Thomas O. (1983). *Introduction to Sahidic Coptic*. Macon, GA: Mercer University Press.
- Layton, Bentley. (2011). *A Coptic grammar with chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*. 3rd ed. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Leipoldt, Johannes and Walter E. Crum (1906). *Sinuthii archimandritae vita et opera omnia: I. Sinuthii vita bohairice*. CSCO 41. Leuven: Peeters.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) (2016). Coptic, In: Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) *Ethnologue: Languages of the World*, 19th ed. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <https://www.ethnologue.com/language/cop>, accessed 2017-02-18.
- Loprieno, Antonio. (1997). Egyptian and Coptic phonology. In: Alan S. Kaye (ed.) *Phonologies of Asia and Africa (including the Caucasus)*, Vol. 1. Winona Lake, Indiana: Eisenrauns. 431-460.
- Peust, Carsten. (1991). *Egyptian phonology: Introduction to the phonology of a dead language*. Göttingen: Peust und Gutschmidt.
- Till, Walter. (1929). Altes 'Aleph und 'Ajin im Koptischen. *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes*, 36. 186-96.

- Richter, Tonio Sebastian. (2006). Coptic. In: Kees Versteegh (ed.), *Encyclopedia of Arabic language and linguistics*. vol. 1. Leiden: Brill. 495-501.
- Worrell, William H. (1934). *Coptic sounds*. University of Michigan studies humanistic series; XXVI. Ann Arbor: University of Michigan Press.

受理日 2017 年 4 月 10 日